

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：34401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K10221

研究課題名（和文）倫理的看護実践を可能にする組織の条件に関する質的・理論的研究

研究課題名（英文）Organizational conditions which make an ethical nursing practice possible: a qualitative and theoretical study

研究代表者

小林 道太郎 (Michitaro, Kobayashi)

大阪医科大学・看護学部・准教授

研究者番号：30541180

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：組織が看護師の実践の倫理性にどう影響するか、また個人の振舞いが組織にどう影響するかを探索するため、スタッフ看護師、看護師長、看護部長にインタビューを行った。看護師が倫理的問題や疑問に気付いたときに、適切な対処を検討したりこれまでのやり方を変えたりするためのコミュニケーションの可能性には、諸個人に心理的安全を感じさせる組織の風土や諸個人間の信頼関係等が関わっていた。また病棟の業務の特性や多忙さ等によっても実践の倫理性は影響されることが看護師たちに感じられていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護倫理はこれまで個々の看護師の倫理性の問題として捉えられることが多かったが、看護師は組織の一員として看護を行っている以上、これを組織の面からもさらに検討していく必要がある。多くの組織で倫理研修や倫理委員会の活動などが行われているが、それらはしばしば、諸個人に対する組織の影響という観点が不十分であり、たとえば個人の倫理的感受性の向上や能力向上等を目標としている。個人と組織との関係が明らかになることによって、目指されるべき組織のあり方もより明確になり、よりよい組織を目指した活動や実践にも多様な可能性が考えられることになる。

研究成果の概要（英文）：In order to explore how an organization influence the ethical behavior of nurses who belong to it and how individuals' behaviors influence the organization, the researchers interviewed staff nurses, head nurses and chief nursing officers. When nurses are aware of ethical problems or concerns, it is important to communicate with other team members to discuss appropriate responses or to find a better way to practice. It was suggested that possibility and quality of communication depended on the climate of the organization, trust between individuals and other organizational factors. The participating nurses felt that the ethical characters of their own practices were influenced by several characteristics of their wards and whether they felt too busy or not.

研究分野：人文学

キーワード：看護倫理 組織 インタビュー

1. 研究開始当初の背景

看護職者の多くは何らかの組織に属している。そのため看護職者は、看護を行う際、看護職者としての倫理や規範だけでなく、自分の所属する組織・施設の制約や影響の下にあるはずである。しかし現在の看護倫理の中では、このことについて十分な議論は行われていない。

- ・看護倫理が参照する規範倫理学は、どのような理論的立場のものであっても、主に個人の行為や性格を問題としてきたため、組織の問題は論じられにくい。
- ・病院やヘルスケア組織における組織倫理の議論はあるが、これらは主に、組織をひとつの単位と捉えた上での、組織全体としての意思決定や振舞いに関する議論である。これらの議論で明らかになっていないのは、組織とそこに属する個人との間の相互関係である。看護職者は組織からどのような影響を受けているのか。そして倫理的看護実践を可能にするような組織とはどのようなものか。

実践的にはさらに、どのようにすれば倫理的実践を可能にするような組織がつけられるのか、が問題となる。多くの組織で倫理研修や倫理委員会の活動などが行われているが、それらはしばしば、諸個人に対する組織の影響という観点を欠いており、たとえば個人の倫理的感受性の向上や能力向上等を目標としている。しかし個人と組織との関係が明らかになれば、それによって目指されるべき組織のあり方もより明確になり、よりよい組織を目指した活動や実践にも多様な可能性が考えられることになるだろう。

研究者らはすでにこの研究に着手して（H27-29 年度基盤（C）「看護の組織倫理に関する理論的・実証的研究」15K11489）、成果を挙げている。これを拡充するために、さらなる研究の継続発展が必要である。

2. 研究の目的

研究者らのこれまでの研究を通じて、次の点が明らかにされた。倫理は、単に個々の看護職者の能力のアウトプットとしてのその都度の実践の判断にかかわっているだけではないということ、看護倫理に組織という観点を導入することにより、組織の継続的な実践の中での改善が問題になるということだ。

看護の具体的な倫理問題は、組織の中で行われてきた過去の（自分たちの）実践を背景に、これまでのやり方では不十分なことや対応できないこととして現れる。そこではもちろん医療や法制度等の一般的な枠組みが前提となっているが、それだけでなく、各施設や組織によって異なるマテリアルな環境、多職種間の関係、組織内の役割や人間関係、慣行や組織文化・風土等が、諸個人の行為を可能にし、また制限するものとして状況に関わっている。このとき倫理的な行動は、それらの条件の下で、また場合によってはそれらの制約条件を部分的に変えながら、新しい行為を提起することとして現れる。

したがって本研究において組織倫理を考えると、規範倫理学が通常考慮しない上記のさまざまな組織的条件の効果や影響関係を、倫理的な行動との関連において明らかにすることである。これは倫理的実践が可能となる組織とはどのようなものかを明らかにすることでもある。

- ・以上の点を踏まえて、本研究の目的は、より具体的に次のことを明らかにすることである。
- ・個々の看護職者の倫理的行動に重要な影響を与える組織の条件にはどのようなものがあるか。個人の行動はそれにどのように影響されるのか（組織 個人）。
- ・個々の看護職者のどのような行動が、倫理的な看護実践を可能にするような組織をつくることに影響するのか（個人 組織）。

これらの諸要素は現時点でまだ明らかでないため、まず探索的な質的研究を行わなくてはならない。また並行して、既存の倫理学説を拡張・更新して組織倫理を論じられるようにするため、理論面からも研究を進める。

3. 研究の方法

[質的研究] 分担者真継を中心に、代表者小林、分担者小西が協力して行う。

H30年度の早い時期に倫理申請を行って承認を得た後、H30-31年度にかけて、調査対象施設のリクルートと各施設の看護職者へのインタビューを実施する。

- ・施設規模等によって組織の条件は異なることが予想されるため、病院規模ごとに3施設ずつ、訪問看護ステーション3施設を対象とする（計15施設）。
- ・職位によって組織での影響力や組織条件の経験のされ方が違うことが予想されるため、各施設の看護部長1名・師長1名・スタッフ看護師2名にインタビューを行う（15施設×4名=計60名）。

インタビューは半構成的面接とし、組織と倫理的実践の関係について感じていることや考えていることなどをできる

500床以上の病院	各区分 3施設ずつ	各施設4名 (看護部長1、 師長1、 スタッフ2)
300-499床の病院		
100-299床の病院		
100床未満の病院		
訪問看護ステーション		

[表 インタビュー対象]

だけ幅広く語ってもらう。

データ分析は、H30-32年度にかけて順次行う。質的帰納的に分析し、次の内容を具体的な文脈に即して抽出する。(1)現場の諸条件や風土はどのように知覚されているか、それらはどのように実践に影響しているか、(2)スタッフや師長のどのような振舞い・態度が、現場の風土および各人の倫理的実践に影響していると知覚されているか、(3)その他に倫理的実践に影響する要素はあるか、(4)病院と訪問看護の違いや施設規模の違いによってこれらの内容がどのように違うか、また職位等の違いによって経験にどのような違いが生じているか。

これにより、組織と個人の関係に含まれる多様な影響関係のあり方やその諸要素を明らかにすることができる。

[理論研究] 代表者小林は、過去の研究(基盤(C)「看護の組織倫理に関する理論的・実証的研究」)の成果を踏まえながら、現在の倫理学・看護倫理の諸理論を批判的に検討する。また組織について考えるために、経営学や心理学等の分野における組織論を参照する。これらを通じて、組織の観点を取り入れた看護倫理の理論的基礎に関する議論を提示することを目指す。分担者小西は、看護管理の議論を検討しながら、看護における組織と倫理の問題について考察する。また、本研究で明らかにされた諸関係について、定量的な研究を行うためにはどのような方法を用いればよいかを検討し、以後の研究につなげる。

4. 研究成果

COVID-19感染症拡大のため、インタビュー実施計画に大幅な遅れが生じた。そのため結果のとりまとめが遅れ、現時点でまだ発表に至っていない。これまでのインタビューの内容等から、現時点での暫定的な示唆として次のことが見出された。

(1)研究者らは、看護倫理に影響する要因として組織のコミュニケーションと信頼関係に注目してきた。看護師や医療者が互いに、気付いた問題や気にかかっていることを伝えられるか、また共同で対処を検討することができるかが、看護ケアの倫理性にとっても重要である。これらのことは単に個人の意識や倫理性のみによって左右されるわけではない。組織のコミュニケーションの質と量は、組織としての特性とも関連しており、そのひとつはその組織に属する諸個人の知覚する心理的安全である。これらの発言をすることによって自分の立場が脅かされることはない、と考えられる場合には積極的な発言が可能であり、そうでない場合には発言は抑圧されがちになる。看護倫理において、個人の規範意識を強化することが目的とされることがあるが、それだけでは不十分である。個々の看護師が疑問に思うことがあっても、どうしてよいかわからない、話し合うことができないということは少なくない。コミュニケーションを可能にするあるいは抑圧する組織の風土を考える必要がある。

(2)コミュニケーションは「あの人には相談できる」など個人間の信頼関係によっても促進される。インタビューでは、何かのきっかけによってそのような関係ができた例が語られた。これらは患者に対するよりよいケアや問題対処、ケアの改善等に結びつきうる。ただし、特に話がしやすい人がいるということは、人によって話しやすさに違いがあるということであり、場合によっては話しにくい人がいるということでもある。組織としては、単なる情報伝達だけでなく、お互いがどう思うかを話し合う対話の機会を増やすような働きかけによって、個人間の信頼関係を促進できる可能性がある。

(3)インタビューでは組織の看護ケアの倫理性に影響すると感じられる要因がいくつか語られた。そのうちで特に目立っていたのは忙しさとマンパワーである。業務量の増加に対して看護師の数が少ないこと、それによって仕事の忙しさが増すことによって、個々の患者に対する十分な対応やケアが難しくなると言われた。またこのことは、看護師間で個々の患者のケアについて話し合ったり意見交換したりする機会の減少にもつながっていた。これらのことについては、人の配置や協力のあり方など含め、組織としての対応が必要である。他方、そのような場合でも何ができるか、どのようにすればよいかと考えることが重要だと考える看護師もいた。

(4)病院や病棟の特性によって、求められる看護ケアの倫理は異なると考えられていた。どのような患者が多いか、どのような治療・療養が行われているか、によって、看護ケアの仕方が異なるだけでなく、倫理的に特に注意しなくてはならない点も違ってくる。特に異動を経験した看護師は、これらの違いに気付いていた。これらのことは、看護倫理の具体的な議論の中でさらに探求される必要があるだろう。

(5)看護部長、看護師長らは、患者に対する看護ケアの倫理だけでなく、スタッフ看護師に充実感を持って働いてもらうということにも配慮していた。そのためには看護師を暴力や暴言から守ること、職場の雰囲気を含め適正な就業環境を保つこと、発生した問題に適切に対処することなど、看護師の人権や倫理と関わるさまざまなことがらが問題となり得る。これらのことも今後看護倫理の中で、あるいは看護倫理との関連の中でさらに論じられることが必要である。

引き続きこれらの成果をとりまとめ、看護系の学会等に論文として発表していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 真継和子, 小林道太郎	4. 巻 16
2. 論文標題 アサーショントレーニングを取り入れた看護倫理研修の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 看護人材育成	6. 最初と最後の頁 62-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	真継 和子 (Matsugi Kazuko) (00411942)	大阪医科大学・看護学部・教授 (34401)	
研究分担者	小西 由起子 (Konishi Yukiko) (70802958)	森ノ宮医療大学・保健医療学部・講師 (34448)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------